博　士　学　位　論　文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 14 集

２０２４（令和６）年度

東 京 神 学 大 学

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号、平成25年4月1日改正施行）第8条による電子公表と併せ、2024（令和 6）年度に本学に於いて博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録し、印刷公表に供するものである。

氏　　名：	宮嵜　薫（東京都）
学位の種類：	博士（神学）
学位記番号：	乙第１２号
学位授与の要件：	学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号）第４条第２項
学位授与の日付：	２０２４年４月３０日
学位論文題目：	「旧約聖書におけるイスラエル 12 部族の歴史的変遷と陰影」
審査委員会：	主査　東京神学大学教授　小友　聡
	副査　青山学院大学教授　左近　豊
	副査　東京神学大学准教授　田中　光
	（学位論文審査実施時職位にて記載）

内容の要旨

学位論文　「旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史的変遷と陰影」　要旨

宮嵜　薫

第1章は、序論を兼ねて、研究対象である「イスラエル12部族」の全体像を総論的に考察した。

旧約聖書全体を通して「イスラエル 12 部族」は様々な形で言表される。神の契約の民であるイスラエルは12部族から成るという主張は旧約聖書に通底しており、イスラエル12部族は歴史的にも実態を持つ集団であることは確かである。

しかしながら、12部族を構成する個々の部族に関する旧約聖書の伝承や物語には多寡や濃淡がある。各部族への扱いは対等でなく評価も多様で変化がある。旧約聖書が内包する「イスラエル 12 部族」をめぐる複雑さには、歴史的変遷や政治的事情が背景にあるはずだと考える。それらは相互的に作用し旧約聖書全体にも影響を及ぼしているはずである。したがって、従来読み過ごされたような箇所を含む丹念な探求・分析によって、12部族からなるイスラエルの民のありようを立体的に把握でき、ひいては旧約聖書全体をよりよく理解することに寄与できるのではないか。

旧約聖書には各部族を平面的・水平的に描き、イスラエル民族の統合体としての「イスラエル12部族」の姿を映し出すテクストがある。これらは神の契約の民イスラエル全体が一つであるという姿を宗教的・神学的に表現し主張するものである。従来、「イスラエル12部族」の研究はそうしたテクストを主に対象としてきたと見られる。1950年代に流布した部族連合（M. ノートのアンフィクチオニー仮説）もこの捉え方によるものであることを提示した。

他方、12部族を構成する個々の部族に関する些細なエピソードや、個別の人物の物語を生き生きと記す聖書テクストは、「イスラエル」を形成した諸部族の歴史や、部族間の関係の歴史的変遷の痕跡を記憶にとどめておこうとするものであろう。それらのテクストの構造・筋立てのみならず、物語を伝える語り口の細部においても光を当てることで、12部族にまつわる実態や事情の痕跡を認めることができよう。その時、各部族に割り当てられた土地は、非常な大きな要因となると思われる。研究の方法論としては文芸学的批評が主軸となるが、幅広い方向からのアプローチを目指した。

第2章からは各論に入り、主要な部族について個別に焦点を当てつつ論じる。

最初に、レビ族（レビ・レビ人）を取り上げた。イスラエルは神である「主」YHWH と結びついてこそ存在意義を維持してきた。主の律法と祭儀を専ら担い続けてきた「レビ」を抜きにしてイスラエルは存続しえなかったと考えらえる。レビは、嗣業の土地を持たず、地理的集団としての実情が不明で、しばしば部族リストから外され、名称も複雑である。こうした不明瞭さの根源は、他部族同様かそれ以上に、イスラエルの歴史の中でたどらされた複雑な経緯によるものと推測できる。

レビの名には「結びつく」という意味がある。レビはレアから生まれたヤコブの息子として「イ

スラエル」に結びついて初めて意義ある位置をもつ存在であり、同時にレビの系譜は「主」に結びつく。レビは当初から、主の民イスラエルの中で主の御用をする特別な役割（職務）を担う者として自他共に認識されていただろう。関連する創世記34章の記事と49章のヤコブの祝福は、レビ人固有の性質と主の担い手としての聖なる職務に言及する内容を含む。また、出エジプト記32章の出来事はレビ人の特質を示すとともに、モーセとの根源的な結びつきを語るものである。

一方、レビ人と祭司の関係は非常に複雑である。モーセの兄で祭司のアロンの唐突な登場後、アロンの家系がレビ族を治めると定められる。民数記では祭司職とレビ人は聖性と職務において明確に区別され、レビ内部にある二重構造も記される。およそ「レビ人」なる集団はモーセの権威との関連において威信と存在意義が保たれていたが、その後王権と結びついて権威を増した祭司集団との関係において「レビ人」の立場は低められたためであろう。しかし申命記では「レビ人祭司」の表現に象徴されるようにレビ人は祭司と同等の扱いを受ける。歴代誌ではレビ人は神殿に仕え、祭司と同じ聖性を持つ集団として描かれる。幕屋時代モーセに忠実であったレビ人を、イスラエルの中心聖所であるダビデーソロモンのエルサレムの神殿に忠実な奉仕者、また主の民「全イスラエル」の核として、歴代誌は位置付ける。

歴代誌はもとより、旧約聖書の多くを書き記したのはレビ人であろう。

「レビ」および「レビ人」は、イスラエル12部族に内在し、歴史的な変化を受け止めながら、特別な主の担い手として働き一元的に存在した。嗣業の地はなく血縁地縁によらず、武力や財産も剥奪された代わりに、「主」を嗣業とする任務に献身した。モーセ以来、その時々の中核的存在と結びついても、変わらず「レビ」の名に立ち続け、主の民イスラエル内部に実在したのである。

第3章は、ヨセフの部族に関する論述である。イスラエル12部族の中に正式には「ヨセフ部族」の名はない。代わりに「ヨセフの家」として、マナセ、エフライムを数える場合もある。地理的に「北方部族」の代表ともされるが、弟格のベニヤミンとの関わりも深く、ヨセフ族が意味する範囲は明快ではない。それだけ古くからイスラエルの歴史の根幹に関わる最重要な部族であったが、イスラエル王国時代前後からの歴史的な激動の影響を容赦なく受けた部族グループであったと見られる。歴史的には、ヨセフの長子とされるマナセが、おそらく「イスラエル」部族集団の形成の初期段階に関わる重要な部族である可能性が高い。

旧約最古の資料「デボラの歌」（士5）にマナセの名はなく、デボラの時代にマナセは一部族としては存在していなかったが、代わりにマキルがヨルダンの西側に定着しており、当時エフライムやベニヤミンと並ぶ部族／氏族だったと推測される。「マナセの半部族」とは、後に西から東に移住したマキルのことであると聖書（ヨシュ13：29–31）は明言しており、歴史的経過ないしマナセ人の

圧迫により移住の上、マナセ の名を帯びるようになったと考えられる。系図上、マキルはマナセの子、東のギルアド地方を取ったのでマキルはギルアドの父とされた。ヨセフの家の系図上マナセが長子、エフライムが次男とされるのは、マナセ（マキル）の方がエフライムより歴史的に古く、ヨマナセの前身とも言えるマキルがおそらくヨセフの家の中核である。マナセは当初、非常に重要な位置を占めていたが、後にエフライムより劣勢になる。マナセ領だった土地はオムリ政権以来サマリアとなり、アッシリアによる北王国イスラエルの滅亡と共に歴史の流れの中に埋もれていった。

エジプトのメルネプタ碑文に刻まれる「イスラエル」はなお謎に包まれているが、旧約聖書はエジプトとヨセフ（の家）との深い繋がりを記し、ヨセフがイスラエルの元祖であった可能性を示唆する。中でもマキルが最古のヨセフグループの名残として痕跡をとどめている。そのマキル－マナセの系譜とエフライムが、ヨセフの家＝イスラエルを継承し、初期イスラエルの形成に貢献し発展したのであろう。おそらく王国時代前まではエフライム人（部族）がイスラエルの政治的主導者であった。モーセから直接任命を受けたヨシュア、士師時代を経てシロの祭司エリの下から出たサムエルである。モーセ（レビ族）からヨシュア、エリ（レビ族）からサムエルへと受け継がれる流れは、王制以前、世襲によらず、カリスマをもったエフライム人を中心として生じ、イスラエルの政治的中心地は、彼らが活躍したエフライムの地（シロ、ギルガル、シェケム）であった。次第にイスラエルの中心地は南下し、主導的人物はサウル（ベニヤミン族）からダビデへと移行する。その役割を最後の士師サムエルが果たし王国時代への橋渡しをした。

第4章で取り上げるダンは、主要でないマイナー部族の代表であるが、謎めいており他部族にない特殊性がある。もともとダン族は古くから祭儀と関わりがあり、ユダに並ぶ勢力もある主要な部族であったことを旧約聖書は証言している。ダンには「裁く」の意味があり、ダン族は元来神的審判の担い手として特別な位置にあったであろう。

士師記17-18章の記事は、複雑で批判的な要素を含むが、ダンの最北の土地征服に言及するとともに、ダン族に固有の伝承とイスラエルの初期の祭儀の様子を記録し伝えるものである。その中でダン族はエフライムの山地のミカの個人的な神殿祭儀の要素を取り去った。しかし、おそらく北王国ヤロブアム王への批判（ベテルとダンでの偶像礼拝）からダンの評価は急激に貶められたとみられる。歴代誌の系図にダン族は記されず、ヨハネ黙示録にもダンの名は登場しない。

第4章には補遺として、ダン以外のマイナー諸部族の消息についても記した。創世記のヤコブの息子たちの誕生物語は、中心でない周辺の土地（ギレアド、ネゲブ、ガリラヤ地方）を与えられた諸部族の歴史的事情と関連していることが伺える。

以上のように歴史的な変遷の中でヨセフの家やダンを筆頭とする周辺諸部族は下降する運命をた

どった。これと反対に、第5章で焦点を当てる部族ベニヤミンは、古くからイスラエルを構成する部族として存在し、地理的にも政治的にも中心的な位置を占めてきたと見られるが、歴史的な激動の影響を受けて大きく変貌した部族でもある。北王国の盟主エフライムとの関係を離れて南ユダに組み込まれる転換を余儀なくされた。地理的に北と南の中間に位置し、両者間にあって変貌しながらも、上昇する部族として存続した重要部族である。

元来ベニヤミンはヨセフの家のエフライム族と関係が深かった。ヨシュアから士師時代までイスラエルの指導者はエフライムから出たが、初めての王サウルはベニヤミン族から出た。旧約聖書に表面化されていないエフライムとベニヤミンの間の微妙な関係性は、サムエル記におけるサムエルとサウルの関係に反映されていると考える。またサウルは台頭するダビデとは対照的に、なおかつバランスを取りながら描かれている。

サムエル記上11章、士師記11章、19–21章に示唆されるサウルおよびベニヤミンとギルアド・ヤベシュとの関係についても論考を重ねた。ヨルダン川東岸のギルアドは、歴史上北王国崩壊後に非イスラエルとみなされたことは、ギルアドに対する否定的記事の理由と考えられ、それがサウルへの批判に結びついた可能性もある。一般にサウルに否定的なのはダビデ寄りのユダ側か王制への反対派であると考えられるが、ベニヤミンやギルアドに対するエフライムからの反感の可能性も考慮するなら、単純にダビデ対サウルの図式では収まらない微妙な部族間の関係性のありかや、諸問題の複雑さの原因に迫ることができよう。

ベニヤミンの蛮行と対ベニヤミン戦争を記した士師記19–21章は非常に困難なテクストで、様々な議論がある。全イスラエルからのベニヤミンへの制裁とその再生、およびヤベシュ・ギレアドの殲滅という結末に注目するなら、士師記19–21章は、捕囚後の帰還民とベニヤミンの地の残留民との対立を契機にしたものかもしれないが、一部族への敵対視と処断が描かれた根源はおそらくそれ一つではなく、ベニヤミンという部族と土地に関する歴史的変遷が複雑に絡んでいるのであろう。

第2–5章で論じた主要部族は、どれもユダと深い関わりがあった。イスラエル12部族におけるユダの首位的な位置付けは、歴史的変遷において獲得されたもので、ダビデを輩出した部族であることと切り離せないと考える。第6章では、ユダ族についての旧約聖書の記述（史実と語り）を分析し、台頭するダビデとユダ王国の内部および周辺事情に関わる文学的組成と創造性を探求した。

創世記の誕生物語においてユダはレアとヤコブの第4子に位置するが、創世記を通してユダの兄たちが退けられ、ヨセフ物語ではヨセフをも抑えてユダが主導的立場とベニヤミンの保護的役割を獲得するさまが描かれている。また、旧約聖書の中で、平穏でない状況下で子が誕生し家系が保たれる話はユダ–ダビデの系譜に集中する。創世記38章のユダの家の話、ユダとダビデをつなぐルツ

記が顕著な例である。レアとヤコブの結婚、ダビデとバトシェバの一件等も同一線上にある。これは、主の祝福を受けた神の民イスラエルが滅び去らず、永続することへの現実的な希求が、ダビデ-ユダの家の永続に集約される流れがあるためであり、この系譜が続くことの上に人為を超えた神の意志が働いているとの主張あるいは神学的視座があると考えられる。

また、ダビデ自身の出自や台頭の経緯、サウル王との関係について、さらに後のユダとベニヤミンの部族間の複雑な関係についても、旧約聖書の叙述や歴史的背景から多角的に考察をした。

第7章では、捕囚後のイスラエルを捉えて独自の歴史観を示す歴代誌を取り上げて、イスラエル12部族に関する旧約聖書の思想の着地点について考察した。歴代誌は、12部族の系図から「全イスラエル」の歴史を描き始める。エルサレム神殿祭儀を司るレビ人を中心に据え、神の民イスラエルを継承する12部族はユダに始まりベニヤミンで終わるという枠組みを明確に打ち出している。歴代誌史家は「ユダとベニヤミン」に、全イスラエルの自己理解における同等の重要性を置く。歴代誌の見る「全イスラエル」とは、神殿奉仕者であるレビ人を中心とし、ダビデ王を出したユダ族と、最初の王サウルを出したベニヤミン族が枠をなす神の王国の共同体の理想像である。捕囚期にエルサレムに代わって政治的役割の中心を担ったのはベニヤミン領のミツパであり捕囚後もベニヤミン族は勢力を保ち無視できない存在でありつづけたという事情が背景にある。レビ人と推測される歴代誌史家が「ユダとベニヤミン」を柱とするイスラエル祭儀共同体を旗印として掲げる一方、ディアスポラのユダヤ人の存続をかけた「エステル記」はベニヤミン族の物語として立てられている。ユダとベニヤミンは、対立や緊張を孕みながらも、イスラエル12部族の両柱として、歴史的にも旧約聖書内部においても共存共立するのである。

最後の結論部では、旧約聖書の最終形態に鑑みて、捕囚後以降、正典編纂に中心的に携わったと考えられる「ユダ」あるいはユダヤ人共同体が、旧約聖書を貫く「イスラエルは12部族によって成る」との思想・理念を主張し通した意図・背景を3つの重層的観点から探った。それは世界の主権、および異教の信仰に対する主張である（ただし、対サマリア教団に関しては留保される）のと同時に、北イスラエルとの敵対を経て南ユダ王国も主への背信の罪ゆえに滅んだ歴史的変遷に基づく本来の「全イスラエル」への立ち帰り、すなわち神の民イスラエルとしての自己意識への神学的回帰の主張でもある。イスラエルの歴史的変遷の陰影と栄光は12部族の土地の獲得と喪失と大きく関わる。各部族の運命も地理的状況（中央か周縁か）によって大きく異なったが、主が与える地に住む12部族からなるイスラエルが、理念的にも実存的にも永遠の祝福の契約の継承によって主の栄光を受け続ける民であり続けるという主張は旧約聖書の土台となった。「ユダとベニヤミンおよびレビ人」を主体とするイスラエル12部族の子らの存在がこれに関与しつづけている。　□

審査結果の要旨

博士論文審査報告書

宮嵜薫　学位請求論文（博士　神学）

『旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史的変遷と陰影』

審査委員会：主査　東京神学大学教授　小友　聡
副査　青山学院大学教授　左近　豊
副査　東京神学大学准教授　田中　光

評価者　小友　聡

1．主題の設定と目的

本論文は、旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史とそのあり様を探究した論文である。イスラエル12部族はイスラエルという象徴的理念と結びつき、旧約のみならず新約にも重要な影響を与えている。イエス・キリストが12部族のユダ族に属することは決定的に重要であり、また、使徒パウロも自らがベニヤミン族に属することを誇りとした。新約聖書において、イスラエルの諸部族は依然として意味を有していた。新約最後の書であるヨハネ黙示録7章においてもイスラエル12部族が救済の象徴的対象として記述されている。このイスラエル12部族について、その歴史とあり様を旧約聖書においてつぶさに説明することを本論文は目的としている。しかし、イスラエル12部族を探究するには、旧約聖書全体を考察の対象としなければならない。それは至難の業だが、本論文はこれに挑んだ。そもそもイスラエル個々の部族はそれぞれに歴史的起源を有し、また歴史的変容がある。旧約聖書の記述を比較しても、それぞれの部族について相互に矛盾する箇所も多い。その典型がレビ族であり、この部族に関する記述には否定と肯定が混在する。唯一の祭司部族として記述される一方で、創世記のヤコブ物語ではレビ族の祖レビは少しも聖性を有するような存在ではない。そこに意味的乖離がある。旧約聖書の諸文書は複雑な編集の歴史を経ているゆえに、諸部族に関するテクストは聖書学的に厳密に検討された上で、各部族の歴史的変遷が説明されなければならない。このような研究は日本では十分にされて来なかった。

本論文は「旧約聖書におけるイスラエル12部族の歴史的変遷と陰影」というタイトル通り、それぞれの部族の歴史的変遷を説明し、またその陰と陽のあり様を探究した。旧約聖書テクストに基づいて、文献学的に検討し、各部族の姿が立体的に描き出されている。立体的というのは、聖書の記述と歴史の変遷を説明するのみならず、各部族の地理的な位相と歴史的な位相が繋がり、さらにまた部族間の関係が見えて来るということでもある。南のユダと北の（ヨセフ族を中心とした）イスラエル諸部族、その間にベニヤミンが介在する面白さを本論文は見事に説明している。このベニヤミン族は歴史記述において極めてアンビバレントであることが論じられ、この民族のまさしく陰と陽が浮かび上がり、主題の意図が読み取れる。本論文はイスラエル12部族の各部族の姿を網羅的に描き出すものではないが、旧約

聖書全体においてイスラエル12部族それぞれの複雑な記述をいわば謎解きする論文となっている。これまで漠然としか見えてこなかった各部族の姿が非常に鮮明に浮かび上がって来る。これによって、イスラエル12部族の新たな全容が解き明かされた。12部族のあり様を謎解きしたという意味において、本論文は主題の目的に到達していると言えるだろう。とはいえ、本論文は論証論文として、明確で独創的なテーゼを立てて論証することを目指してはいない。その点で課題があると審査委員から指摘がなされた。

2．論文の概要

本論文は、7章構成である。第1章は総論であり、イスラエル12部族を総論的に扱う。イスラエル12部族は歴史的に実態を有する集団ではあるが、個々の部族に関する伝承や物語には多寡や濃淡があり、その評価も多様である。それゆえに、従来読み過ごされてきた箇所を丹念に探究・分析することによって、イスラエルの民のあり様を立体的に把握できるという本論文の見通しが最初に立てられる。まず、1950年代に流布した部族連合（M.ノートのアンフィクチオニー仮説）を検証し、イスラエル12部族を民族の統合体として捉えることの可否について論じられる。他方、個々の部族のエピソードを記す聖書テクストは、諸部族の歴史や、部族間の関係の歴史的変遷の痕跡を記憶にとどめておこうとするものであり、これらを文献学的に扱い、分析し、読み解くという本論文の方向が提示される。

第2章から6章までは各論である。その最初に、レビ族に焦点があてられる。レビは「結びつく」という意味を含み、その系譜は「イスラエル」だけでなく、「主」とも結びつき、さらにモーセとの根源的な結びつきを有する。一方、レビと祭司の関係は複雑で、レビ人集団は祭司集団と微妙な関係があった。レビ族はイスラエル12部族に内在し、歴史的な変化を受け止めながら、特別な主の担い手として一元的に存在した。この部族は尊敬もされるが、畏怖され、また嫌われるという両義性を示す。12部族の中で唯一、土地と財産を持たないレビ族の特質について、出エジプト記32章の分析からレビ族の献身の姿勢を本論文は読み取っている。

第3章はヨセフ部族を扱う。ヨセフ部族はマナセ族とエフライム族を指し、北方部族の代表である。マナセが長子、エフライムが次男とされるのは、マナセの方が歴史的に古いことを示す。マナセの前身はマキルであった。マキル・マナセの系譜とエフライムは共にヨセフの家、すなわちイスラエルを継承し、初期イスラエルの形成に貢献した。王国時代前まではエフライムがイスラエルの政治的主導者であった。エフライム族ではヨシュアとサムエルが王国時代以前の人物として重要である。しかし、その後、イスラエルの場所の中心はエフライムから南下してくる。その流れをベニヤミン族のサウル、ユダ族のダビデが担うことになる。この独自の見通しが本論文の一つの重要な伏線になっている。

第4章は、ダン族である。ダン族はマイナー部族の典型であって、そのあり様は謎めいている。士師記17－18章の複雑な記述がダン族の謎を解く鍵になる。本論文はこのテクストを分析し、ここにダン族の根源的な伝承が保存され、北王国ヤロブアム王への批判からダン

の評価が貶められたと読み解く。ダン族の名がヨハネ黙示録7章に存在しない謎について、旧約テクストから推測がされ、ダン族の陰影が浮かび上がる。

第 5 章はベニヤミン族である。この部族は古くからイスラエルを構成する重要な民族として存在し、地理的にも中心的位置を占めたが、歴史的な激動の影響を受けて変貌した部族である。ベニヤミン族はもともとエフライム族と関係が深いが、エフライムとベニヤミンの間の微妙な関係性がサムエルとサウルの関係に反映されている。本論文はサムエル記上 11 章の分析からそれを論証している。さらに、士師記 19－21 章にはベニヤミンの蛮行と対ベニヤミン戦争という難解な記述がある。本論文はこれに挑み、ベニヤミン族の歴史的変遷の複雑さを説明した。

第 6 章はユダ族の考察である。ユダ族は首位的な位置づけがされるが、これは歴史的変遷において獲得されたもので、ダビデを輩出したことと切り離せない。ヨセフ物語ではヨセフ（エフライムの父）が抜きん出た存在であるにもかかわらず、ヨセフを抑えてユダが主導的立場を示し、ベニヤミンの保護的役割を果たす。創世記 38 章の記述など、ユダに関するおぞましい記述はあるが、にもかかわらず主の祝福を受けた神の民イスラエルは滅び去らず、永続するという現実的希求において、ユダ・ダビデの系譜を軸とするユダ族重視の神学的な視座があることを本論文は説得的に説明する。

第 7 章は捕囚後のイスラエルの歴史観を示す歴代誌を取り上げる。この章は総合的考察と言っても良い。この歴代誌は 12 部族の系譜から全イスラエルの歴史を描く。そこにおいて、ユダとベニヤミンに全イスラエルの自己理解が投影される。それは歴代誌史家の歴史観によるものであって、ダビデ王を出したユダ族と、最初の王サウルを出したベニヤミン族は、共に枠を成す共同体の理想像でもある。捕囚後には、ベニヤミン族は無視できない存在であり続けたと本論文は説明する。注目すべきことに、エステル記はベニヤミン族の物語として読み取れる。ユダとベニヤミンは対立や緊張を孕みながら、イスラエル 12 部族の両柱として共存存立するのである。

以上、本論文の概要から、イスラエルの諸部族のあり様が具体的に浮き彫りにされる。すべての民族を網羅的に詳述してはいないが、取り扱われたレビ族、エフライム族とマナセ族、ダン族、ベニヤミン族、ユダ族の立体的な姿と歴史的変遷が説明される。捕囚後の共同体のあり様もユダ族とベニヤミン族の共存であり、それはまたサマリヤとの対立関係を写し出している。本論文ではイスラエル諸部族の陰と陽のあり様を重層的に読み取ることができる。全体として読み応えのある論述がされている。

3．研究方法

本論文が用いる方法は文芸学的方法であり、また修辞批判的方法とも言ってよい。つまりテクストの最終形態を重視する共時的方法を用いている。それは諸部族の叙述が旧約聖書の各文書において多様であって、色合いがあり、それぞれの部族が固有性を示していることをうまく説明する。しかし、本論文はそれと同時に歴史批判的に思考し、各部族の歴史的変

遷を辿る。いや、むしろ一貫して歴史批判的方法を用いて、各部族の歴史的変遷を説明している。たとえば、士師記では負を背負うベニヤミン族が捕囚後にユダ族と結びつきを強め、無視できない存在となったことをエステル記から読み取っている。このエステル記の読み取りから、アンビバレントに叙述されるベニヤミン族の最終的到達点が説明される。つまり、エステル記に見られるベニヤミン族のあり様は、まさしく捕囚後にこの民族がユダ族と共に両柱的存在となったことから謎解きできるのである。本論文は共時的方法と通時的な方法がうまくかみ合い、また神学的な考察もされ、方法論的にバランスが取れていると言うことができる。

しかし、これについては審査委員から批判的意見も提出された。それは、歴史的考察において引用される文献が主としてMノート、ドゥ・ヴォー、フォン・ラートなど20世紀半ばの、しかも邦訳の研究書に頼りすぎているという指摘である。歴史記述の史実的探究であるならば、最新の文献や聖書考古学的な知見なども取り入れるべきであり、本論文は歴史的見方について楽観的過ぎるのではないか。個々の部族の伝承や物語の歴史的変遷を辿る場合には、テクストを文献学的に、もっと慎重に扱うべきではないかという意見である。確かに、本論文では文芸学的な手法と歴史批判的観点の組み合わせで説明がなされるが、どの部分が文芸学的読み取りで、どの部分が歴史批判的な観点なのかが区別されてはいない。それが多少の読みにくさを感じさせるという指摘もあった。

本論文はしかし、諸部族のあり様のすべてを歴史的に説明するという姿勢ではない。旧約聖書のテクストには修辞的な意味や神学的な意味も含まれており、テクスト上の共時的な読み取りからも、字義的に意図された意味や、表現の重層性や多様性も浮かび上がって来る。そういった読みの面白さを紹介しながら、歴史的な変遷をも丁寧に説明するということは本論文の特徴であり、主題とも繋がっていると評価することができる。一つの方法論的に徹底するというより、その都度、テクストの分析においてふさわしい方法を用い、その結果として、各部族の存在のあり様と歴史において陰と陽をうまく表現することができている。そこに本論文の強みがある。

4．先行研究との対話

本論文は、イスラエルという統合体について論じる論文ではなく、諸部族のあり様と変遷を論じるものであり、それゆえに扱われる二次文献は多岐にわたる。文献表を瞥見してそのことは確認できる。2000年以降の論文も多く扱われている。とりわけレビ族、ダン族、ベニヤミン族など個々の部族の考察においては、多くの先行研究を踏まえて、本論文独自の解釈が論じられている。この分野では日本語の文献が極めて少ないゆえに、とりわけ英語圏の論文との対論となっている。約150の外国語の諸論文の数は必ずしも多くはないが、十分といえるだろう。

本論文は、第1章でイスラエル12部族の初期形態とイスラルの起源について論じられるが、複雑な議論には深入りせず、12部族が実態のある集団的存在であったことを確認する。

M.ノート、ドゥ・ヴォー、デ・ハウシュ、ロジャーソンなどの学者たちの議論が紹介され、研究史的な論説がされる。宗教的連合組織体としての 12 部族の姿は必ずしも虚構の産物ではなく、史実か否かはわからないが、何らかの実態を有したと説明がされる。それゆえ、本論文では（14-15 頁）、統合されたイスラエル 12 部族の姿を描くテクスト（A）ではなく、各部族の歴史的変遷の様子を伝えるテクスト（B）を考察の対象とする。つまり、イスラエル 12 部族の起源よりも、その存続のあり様を見据えるという方向が提示される。ここに本論文の著者の立ち位置がある。

しかし、審査委員からは、本論文第 1 章のイスラエル 12 部族の歴史的探究に関する文献との対論について、以下の意見があった。考古学的歴史学的考察に関しては膨大な研究史があるにもかかわらず、それへの言及や議論が少ないという指摘である。また、M.ノートのアンフィクチオニー仮説の解説についても、並木浩一氏の論文を参照することで済まされているのは不十分だという意見があった。また、イスラエル民族の形成期を証言する士師記やヨシュア記の記述の史実性についてきちんとした議論がされるべきとの指摘もあった。最近のサムエル記研究については、以下の文献が審査委員から紹介された。B.Halpern, David's Secret Demons: Messiah. Murderer, Traitor, King. Eedmans, 2001+ S.L.McKenzie, King David: A Biography. Oxford Univ. Press, 2000.

確かに、イスラエル 12 部族に特化した研究史的議論は複雑であるゆえに、本論文ではもう少し丁寧に研究史概観がされる必要があったと言える。また 12 部族問題に関する詳細な研究史的議論が序論としてされるべきであったかも知れないが、本論文が各部族とまた部族間の実態を描き出そうという意図は十分にくみ取ることができる。

5．学術的意義と課題

本論文は著者、宮嵜薫氏が 10 年にわたるイスラエル 12 部族の研究を纏めたものである。イスラエル諸部族のあり様、また相互の関係を説明し、さらにまたその歴史的変遷においてそれぞれの部族の陰と陽を明らかにした。イスラエル 12 部族の統一的理念ではなく、その実態を諸文書間の記述の相違と歴史的変遷から、立体的に説明した論文である。各部族の重層性、多様性が描き出され、これまで漠然としか理解されてこなかった事柄が見事に、また面白く説明されている。その意義は大きい。特に、レビ族が有する両義性、ダン族の歴史的評価の変遷と消滅の謎、ベニヤミン族の評価のアンビバレンスが巧みに論じられている。ベニヤミン族に関する説明は際立っている。士師記 19－21 章でベニヤミン族は滅亡の危機にあったが、その後に回復し、捕囚後にはユダ族と共に共同体の両柱を形成したことが、歴史的最終段階として捕囚後ペルシア期に成立したエステル記の解釈から説明されている。そこにおいて、サウルの復権という意図があったことが結論づけられている。このようなベニヤミン族の歴史的変遷において、この部族の陰と陽が範例的に、極めて明瞭に説明される。さらにまた、ユダ族がダビデの部族として、イスラエル民族の終末論的な希望を写し出すに至る変遷のあり様も見事に説明されている。これによって、イスラエル 12 部族が新約聖書

に繋がる道が示される。新約聖書では、レビ人は祭司と独自の繋がりを有し、またダン族はヨハネ黙示録 7 章では消失した民族である。さらにユダ族はダビデの延長線上に到来するメシアの到来をほのめかす。このように諸部族の歴史の背景にあるものが本論文から見えて来るのは確かである。本論文が各部族について独自の神学的な読み取りをしていることも、こういった消息をうまく説明している。

しかし、本論文にはまた幾つかの課題も指摘できる。既に触れたことではあるが、12 部族問題の研究史的議論が不十分であるため、本論文が研究史的にどのような位置にあるかが見えてこない。また、歴史的考察が各部族の変遷のあり様をうまく説明することはできるが、歴史学的・考古学的に最新の知見や情報が反映されていない。特にイスラエルの初期の考察については十分な議論がされておらず、最新の考古学的な知見に従えば、各部族の存在形態について確かなことは言えないという結論にすらなり得る。本論文が歴史的考察について詳論を避けて、従来通りの楽観的な歴史像に捕らわれてはいないか、という問いが生じる。聖書を歴史記述的に説明するということ、聖書を歴史的に再構成するということは同一ではなく、両者の間に隔たりがあることが本論文は十分に認識されていないのではなかろうか。このような通時的問題が本論文において問われる。

本論文は方法論的に一貫した議論はしていない。むしろ、諸部族に関する諸文書の記述と歴史的変遷という両方の側面から各部族の陰と陽を描き出すために、その都度その考察に適した方法を選択している。それによって各部族の多様性が見事に描き出される。けれども、イスラエル 12 部族という統一的理念というものについて、やはりきちんと説明されるべきではないかという問いが生じる。本論文第 7 章で捕囚後のイスラエルについて議論はされるが、そこからはユダ族とベニヤミン族の両柱性は説明されるが、サマリヤについては旧約では言及されないという結論で片付けられる。しかし、サマリヤについて沈黙しているとしても、最終的に総体としてのイスラエルとは何かという問題は依然として存在するのである。諸部族の多様性と同時に、イスラエル 12 部族という統一体について論じる必要がやはりあるのではないだろうか。

6．最終評価

本論文は、イスラエル 12 部族を多様な側面から描き出した優れた論文である。特にレビ族、ダン族、ベニヤミン族について深く掘り下げて論じ、深い意味を探り出した。その功績は大きい。また、ユダ族を論じ、イスラエルの終末論的希望という意味をも神学的に説明したことも評価される。さまざまなテクストを文献学的に読み解き、イスラエル 12 部族の陰影がきちんと解き明かされている。日本の旧約学研究において本論文は確かに貢献をしたと認められる。以上、審査委員会は本論文を高く評価し、宮嵜薫氏に学位の授与を決定した。